

(指宿市十二町下里・橋牟礼)

### 位置と環境

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里・橋牟礼に所在する。遺跡は、海岸に向かって緩傾斜する標高20m前後の火山性扇状地にある。

これまで丈六遺跡、あるいは、指宿遺跡などと呼ばれてきているが、現在は、橋牟礼川遺跡として包括され、そのうち、国指定史跡に指定されたエリアを国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡と呼称している。

### 調査の経緯

橋牟礼川遺跡の発見は、大正4年に指宿村出身で、当時、旧制志布志中学の学生であった西牟田盛健が土器片を採集したことによる。その後、大正6年の山崎五十麿の報告によって、アイヌ式土器と弥生式土器が同時に出土する遺跡として全国に知られるところとなった。

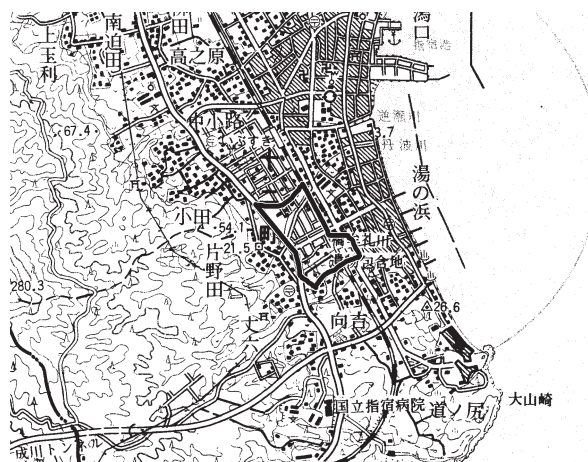
これが契機となって、大正7、8年に濱田耕作、長谷部言人らによって発掘調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代の土器であることが日本で初めて層位学的に実証された。この成果をもって大正13年には、国指定史跡に指定され、昭和54年に2.36haが公有地化されている。

大正の調査以後は、昭和23年に山崎五十麿、寺師見国、村野守治らによって鹿児島県国立公園候補地学術調査が行なわれ、橋牟礼川遺跡の重要性が追認された。

その後、昭和49年、昭和50年に確認調査が行なわれ、国指定史跡の範囲内に奈良～平安時代の土壌墓群や古墳時代の土器捨て場などが発見されている。

昭和54年、国指定史跡の隣接地に計画された指宿駅西部土地地区画整理事業に先行して、遺跡の確認調査が行なわれ、橋牟礼川遺跡北側のおおよその広がり確認された。

昭和61年からは、指宿駅西部土地地区画整理事業に伴う発掘調査が開始された。平成3年まで行なわれた発掘調査で、度重なる開聞岳の噴火によって火山災害を受けた遺跡であることや古墳時代の大集落があることがわかった。特に、平安時代（西暦874年



第1図 橋牟礼川遺跡の位置



写真1 橋牟礼川遺跡全景

3月25日)の開聞岳火山灰に直接埋まった当時の集落が発見され、注目を集めた。遺跡の重要性に鑑み、平成4年度からは、重要遺跡の範囲確認調査が行なわれ、平成8年度には、新たに1.86haが国指定史跡の追加指定を受けた。

### 遺構と遺物

濱田耕作は、指宿遺跡の発掘調査報告書の中で、橋牟礼川遺跡のことを「先史時代のポンペイ或いはサントリン」と称したが、その予見はまさしく的中した。

昭和63年には火山灰の重みで倒壊した建物跡が発見され、西暦874年の開聞岳の火山災害を直接受けた遺跡が保存されていることが証明された。その後の調査でも、通称紫コラと呼ばれるこの火山灰の直下から、畠跡や道跡、貝塚などが発見され、当時の集落がそのまま埋没していることが確認された。特に畠については広範囲から出土しており、西暦874時点で橋牟礼川遺跡一帯では畠が営まれていたこと

が明らかになっている。遺物では、「真」，「府」あるいは「厨」と書かれた墨書土器や転用硯，丸柄や巡方などが出土している。何らかの政治的な施設の存在をうかがわせる。

橋牟礼川遺跡では，西暦874年3月25日の地表面を掘り下げると，7世紀第4四半期の開聞岳噴火によって堆積した火山灰，通称青コラが堆積している。この青コラの下層から，古墳時代の大集落が発見されている。竪穴住居跡群，土器捨て場，貝塚，溝状遺構，道跡等の遺構群が発見された。また，遺物では，大量の成川式土器の他，初期須恵器，子持勾玉，青銅製鈴青銅製鏡片等の威信材も出土している。

### 特徴

平安時代の開聞岳噴火は，「日本三代実録」に記載のある開聞岳噴火と一致することが確認され，紫コラが，西暦874年3月25日（貞観16年3月4日）に堆積した火山灰であることが判明した。橋牟礼川遺跡は，平安時代の「ある日」が特定できる火山災害遺跡として稀有な事例と言えよう。

さて，青コラの堆積前後と青コラと紫コラの2つの火山灰にはさまれた時期は，ちょうど，古代隼人の具体的な活動が文献上に登場する時期に該当する。まさに，火山灰の下には，古代隼人の文化が封印されている。また，青コラ下層の古墳時代の遺構や遺物を見ると，弥生時代以来の伝統を色濃く引き継ぐものもあるが，決して閉鎖的なものではなく，中央との関わりを示す威信材も多く見られる。九州本土の最南端にあって，この古墳時代文化と奈良・平安時代の文化とを比較することで，どのように「隼人」の文化内容のが変化していったのかを知ることができる。当該期の文化の変遷が律令制度や火山災害の影響をどの程度受けているのかといった点も含めて，橋牟礼川遺跡の提出する「隼人」，そして「災害文化」に関する成果の意義は重要であろう。

### 資料の所在

出土遺物は，指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに展示・保管されている。

### 参考文献

指宿市教育委員会1996「橋牟礼川遺跡VI」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』16 （下山 覚）

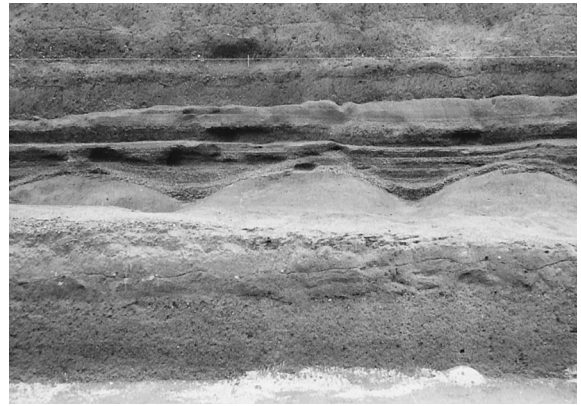


写真2 橋牟礼川遺跡の地層

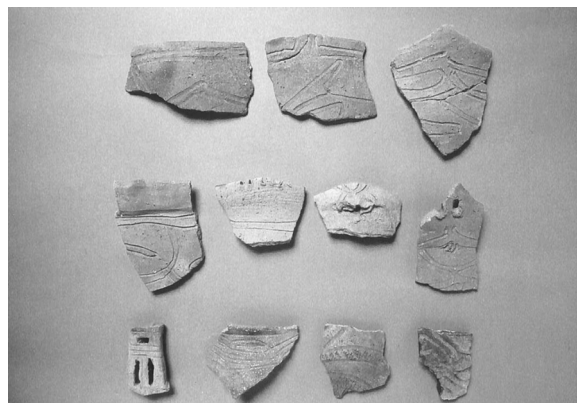


写真3 大正8年の発掘調査で出土した縄文土器  
(京都大学所蔵)

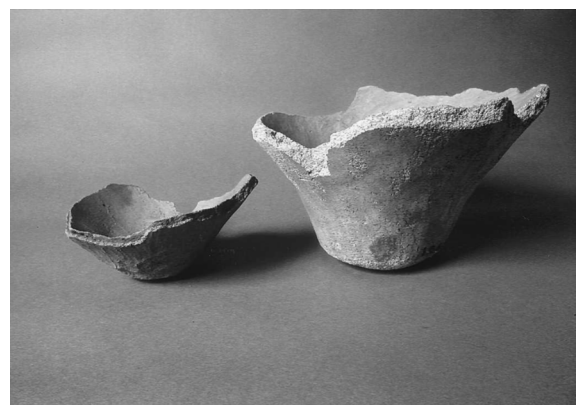


写真4 大正8年の発掘調査で出土した弥生土器  
(京都大学所蔵)





写真5 古墳時代の竪穴住居跡群



写真6 古墳時代の土器捨て場



写真7 須恵器長頸壺（青コラにパックされた状態で出土した。この壺形土器の年代観から火山灰の年代が推定できるようになった。）



写真8 874年の火山噴火で倒壊した掘立柱建物跡（四角の白線部分が床の範囲。左側に火山灰の中で建材が腐食化した部分があった。）



写真9 874年の火山噴火で埋没した畠地（現代の畠の下には、平安時代の畠が広がっている。道跡や高床倉庫跡も同時に見つかった。）



写真10 874年の火山災害に伴い発生した土石流跡（茶色の部分が旧河川の肩の部分。火山灰の2次堆積物と巨石が川を埋め尽くしている。）



写真11 古墳時代（左）と8世紀代（右）の甕（脚台を持ち、胴部に粘土紐をめぐらすなど共通点が多い。）



写真12 古墳時代の成川式土器群（左）と平安時代の須恵器や土師器（右）

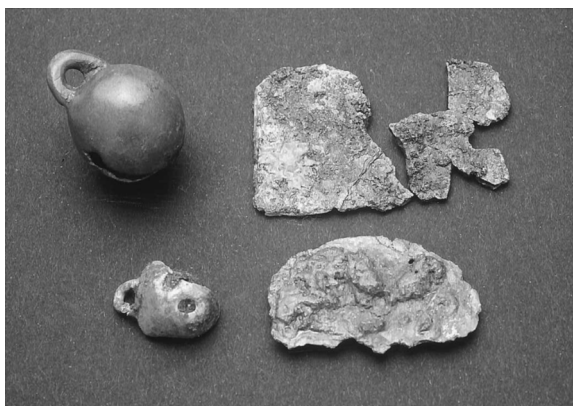


写真13 古墳時代の青銅製の鈴（左），平安時代の役人の飾り金具である巡方（右上）と丸柄（右下）



写真14 古墳時代の装飾品と祭祀遺物（左上から土製丸玉，ガラス製丸玉，子持勾玉，蛇紋岩製装飾品，石製勾玉，ガラス製小玉）

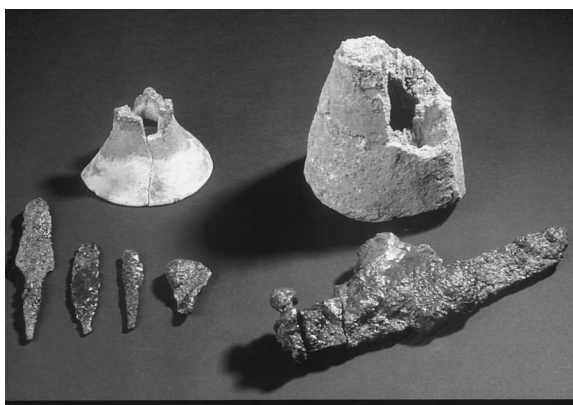


写真15 韃の羽口と鉄器（中央より左側は古墳時代，右側は平安時代の遺物）



写真16 古墳時代の漁撈具（石錘，土錘，鉄製釣針）と軽石製の舟形模造品

（写真11～16は熊谷武二撮影）